

避妊薬

製品群No. 50

ワークシートNo.30

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意 すべき副作用のおそれ	D 濫用のお それ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	用法用量	効能効果
		薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべ き副作用のおそれ	薬理に基づく 蓄積性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそ れ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 換るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)				
評価の視点		併用薬品(他 剤との併用 により重大な 問題が発生す るおそれ)	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの						使用量に上 限があるも の	過量使用・誤 使用のおそ れ	長期使用に よる健康被 害のおそれ		
メンフェコー ル																	

その他の女性用薬

製品群No. 51

ワークシートNo.31

リスクの程度 の評価	A 薬理作用		B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果	
評価の視点	薬理作用		相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)					スイッチ化等に伴う使用環境の変化
			併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの						使用量に上限があるもの	適量使用・誤使用のおそれ	長期使用による健康被害のおそれ			
トリコマイシン クロラムフェニコール	なし	クロマイ錠	グラム陽性、陰性菌に抗菌作用				頻度不明(長期連用・内服・注射等全身投与と同様な症状)	頻度不明(過敏症)		本剤成分過敏症 既往歴	高齢者					必要最小限の使用。内服させない。	長期連用しないこと。	1日1回1錠、局所に挿入	クロラムフェニコール感性菌による細菌性膣炎
エチニルエストロジオール	外用なし、プロセキソール錠	前立腺、精の重量を減少させ血中テストステロン値を低下させる			血糖降下薬(血糖降下作用の減少)、リトナビル(本剤の作用減少)	頻度不明(心不全、狭心症、長期連用:血栓症)	頻度不明(黄疸、肝機能異常、血圧上昇、精神障害の再発、大量継続投与により高カルシウム血症・ナトリウムや体液貯留、不正出血、経血量変化、下腹部痛、乳房緊満感、乳房痛、悪心、おう吐、食欲不振、胃痛、頭痛、めまい、倦怠感、陰萎	頻度不明(過敏症)		エストロゲン依存性腫瘍およびその疑い(腫瘍の悪化あるいは顕性化)、血栓性静脈炎・肺塞栓症または既往歴(血液凝固能の亢進によりこれらの増悪)	肝障害、子宮筋腫、子宮内腺症または既往歴、心疾患・腎疾患または既往歴、てんかん、糖尿病、高齢者、					長期連用:血栓症、卵巣ホルモン剤を長期間(1年以上)使用した閉経期以降の婦人では子宮内腫瘍を発生する危険度が対照群に比べ高く、使用期間、使用量と危険度の上昇に相関性があることを示唆する疫学調査あり		1回0.5~1mg、1日3回。適宜増減。高齢者減量	前立腺癌、閉経後の末期乳癌(男性ホルモン療法に抵抗を示す場合)

その他の女性用薬

製品群No. 51

ワークシートNo.31

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ化等に伴う使用環境の変化	I 用法用量	J 効能効果
		併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの		適応禁忌	慎重投与(投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)	使用量に上限があるもの	過量使用・誤使用のおそれ			
エストロ オール	貼付剤あり、エストラ ダームM	卵巣機能低下または消失によるエスト ロゲン欠乏症 による閉経症 状の改善。	リファンピリン・抗てんかん 薬・HIV逆転写酵素阻害薬・ セイヨウオトギリソウ含有食 品・ステロイドホルモン(本剤 の代謝が促進され血中濃度 が低下)、プロテアーゼ阻害 薬(本剤の血中濃度が変化)	頻度不明(静 脈血栓塞栓 症、血栓性静 脈炎)、乳癌・ 冠動脈性心 疾患・脳卒 中・痲呆など の発生との 関連性を示 唆する報告 あり。	頻度不明(ア ナフィラキ ン様症状)	頻度不明(片 頭痛、静脈瘤 の悪化、胆石 症、胆のう疾 患、胆汁うっ 滞、下痢、下 肢痛、ポルフィ リン症の悪 化、喘息の悪 化、耳硬化 症)、5%以上 (一次刺激性 の接触性皮 膚炎、不正出 血、消退出 血、帯下、乳 房緊満感)、 0.1~5%未 満(かぶれ、 水泡、色素沈 着、外陰部腫 脹感、外陰部 掻痒感、子宮 内膜増殖、乳 房痛、乳頭 痛、乳腺症、 頭痛、眠気、 めまい、動 悸、おう吐、 吐気、下痢、 腹部膨満感、 便秘、心窩部 痛、浮腫、肝 機能障害、腹 痛、下腹部 痛、関節痛、 腰痛、耳鳴、 体重増加・減 少、倦怠感、 トリグリセラ イド上昇、フィ ブリンノーゲン 増加)、0.1% 未満(不眠、 胸部不快感、 血圧上昇、発 熱)	頻度不明(過 敏症)	エストロゲン依存 性腫瘍およびその 疑い(腫瘍の悪化 あるいは顕性化)、 血栓性静脈炎・肺 塞栓症または既往 歴(血液凝固能の 亢進によりこれら の増悪)、本剤成 分過敏症既往歴、 妊婦または妊娠の 可能性および授乳 婦、動脈性の血栓 塞栓症	子宮筋腫、子宮内 膜症、乳癌家族素 因が強いまたは乳 房結節、乳腺症、 乳房レントゲンに異 常、高血圧・心疾 患・腎疾患または 既往歴、糖尿病、 片頭痛、てんかん、 肝障害、術前また は長期臥床状態、 全身性エリテマト ーデス、高齢者				大量投与：ナトリ ウムや体液の貯 留	長期運用：血 栓症、卵巣ホル モン剤と黄体 ホルモン使用 した女性では 乳癌を発生 する危険度 が対照群に 比べ高く、使 用期間と危 険度の上昇 に相関性が あるとの報告 あり	1回1枚(0.72mg)貼付。2日 ごとにかえ	更年期障害お よび卵巣欠落 症状に伴う：血 管運動神経症 状、泌尿生殖 器の萎縮症 状、閉経後骨 粗鬆症		

抗ヒスタミン薬主薬製剤

製品群No. 52

ワークシートNo.32

リスクの程度 の評価	A 薬理作用		B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	用法用量	効能効果
	評価の視点	薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		薬理に基づく 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそれ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)			スイッチ化 等に伴う使 用環境の変 化		
			併用禁忌(他 剤との併用 により重大な 問題が発生す るおそれ)	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの					使用量に上 限があるもの	過量使用・誤使 用のおそれ	長期使用に よる健康被 害のおそれ				
抗ヒスタミン成分	塩酸シフェンヒドラミン	ペナ錠	抗ヒスタミン作用: H1受容体に対しヒスタミンと競合的に拮抗することにより作用をあらわす。 ヒスタミン遊離抑制作用。	アルコール・中枢神経抑制剤・MAO阻害剤(中枢神経抑制作用が増強)、抗コリン作用を有する薬剤(抗コリン作用が増強)			頻度不明(口渇、悪心・嘔吐、下痢、めまい、倦怠感、神経過敏、頭痛、眼気、動悸) 自動車の運転等危険を伴う機械の操作	頻度不明(過敏症)			緑内障(悪化)、前立腺肥大等下部尿路に閉塞性疾患(悪化)	授乳中の婦人、未熟児、新生児、妊婦又は妊娠している可能性のある婦人、高齢者						塩酸シフェンヒドラミンとして、通常成人1回30~50mg(3~5錠)を1日2~3回経口投与する。なお、年齢、症状により適宜増減する。	尋麻疹、皮膚疾患に伴うそう痒(湿疹、皮膚炎)、枯草熱、アレルギー性鼻炎、血管運動性鼻炎、急性鼻炎、春季カタルに伴うそう痒
	d-マレイン酸クロルフェニラミン	ボララミン錠 2mg	抗ヒスタミン作用	中枢神経抑制剤・アルコール・MAO阻害剤・抗コリン作用を有する薬剤(相互に作用を増強)、ドロキシドパ、ノルエピネフリン(血圧の異常上昇)	痙攣・錯乱・ショック(頻度不明)		5%以上又は頻度不明(鎮静、神経過敏、頭痛、焦燥感、複視、眼気、不眠、めまい、耳鳴、前庭障害、多幸症、情緒不安、ヒステリー、振戦、神経炎、協調異常、感覚異常、霧視、口渇、胸やけ、食欲不振、悪心・嘔吐、腹痛、便秘、下痢、頻尿、排尿困難、尿閉等低血圧、心搏亢進、頻脈、期外収縮、鼻及び気道の乾燥、気管分泌液の粘性化、喘鳴、鼻閉、溶血性貧血、肝機能障害(AST(GOT)・ALT(GPT)・ALPの上昇等)、悪寒、発汗異常、疲労感、胸痛、月経異常、0.1%未満(血小板減少)、眠気を催すことがあるので自動車の運転等危険を伴う機械の操作	5%以上又は頻度不明(過敏症)		本剤の成分又は類似化合物に対し過敏症の既往歴、緑内障(緑内障の増悪)、前立腺肥大等下部尿路に閉塞性疾患(症状の増悪)、低出生体重児・新生児(痙攣等の重篤な反応があらわれるおそれ)	眼内圧亢進、甲状腺機能亢進症、狭窄性消化性潰瘍、幽門十二指腸通過障害、循環器系疾患、高血圧症、高齢者、妊婦又は妊娠している可能性のある婦人						d-マレイン酸クロルフェニラミンとして、通常、成人には1回2mgを1日1~4回経口投与する。なお、年齢、症状により適宜増減する。	じん麻疹、血管運動性浮腫、枯草熱、皮膚疾患に伴うそう痒(湿疹・皮膚炎、皮膚そう痒症、薬疹)、アレルギー性鼻炎、血管運動性鼻炎、感冒等上気道炎に伴うしゃみ・鼻汁・咳嗽。	

抗ヒスタミン薬主薬製剤

製品群No. 52

ワークシートNo.32

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用	C 重篤な副作用のおそれ	C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化) につながるおそれ	G 使用方法(誤使用のおそれ)	H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	用去用量	効能効果				
評価の視点	薬理作用	相互作用	重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	薬理に基づく 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそれ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)			使用方法(誤使用のおそれ)	スイッチ化 等に伴う使 用環境の変 化		
		併用禁忌(他 剤との併用に より重大な問 題が発生する おそれ)	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの			使用量に上 限があるもの	過量使用・誤使 用のおそれ	長期使用に よる健康被 害のおそれ			
抗ヒスタミン成分	メキタジン セスラン錠	ケミカルメ ディエーター拮抗 作用、抗ヒス タミン作用、 抗アレルギー 作用	中枢神経抑制剤・アルコー ル(眠気)、抗うつ剤・MAO阻 害剤・アトロピン様作用を有 する薬剤(口渇、排尿困難)、 メキサレン(光線過敏症)	肝機能障害・ 黄疸・血小板 減少(頻度不 明)	ショック、アナ フィラキシー 様症状(頻度 不明)	0.1~5%未 満(眠気、け ん怠感、ふら ふら感、口 渇、胃部不快 感)、0.1%未 満(AST (GOT)、ALT (GPT)の上 昇、血小板減 少、頭痛、め まい、下痢、 便秘、食欲不 振、嘔吐、胃 痛、腹痛、胸 部苦悶感、心 悸亢進、排尿 困難、咽頭 痛、浮腫、顔 面潮紅、視調 節障害、月経 異常、味覚異 常、口内しび れ感)、頻度 不明(黄疸)、 自動車の運 転等危険を 伴う機械の 操作。	0.1%未満(過 敏症)	本剤の成分、フェ ノチアジン系化合 物及びその類似化 合物に対し過敏症 の既往歴、膵内障 (膵内腫を悪化)、 前立腺肥大等下 部尿路に閉塞性 疾患(排尿困難等)	腎障害、高齢者、 妊婦又は妊娠して いる可能性のある 婦人、授乳婦、低出 生体重児、新生 児、乳児、幼児又 は小児			過量投与で眠 気、悪心、嘔吐、 軽度の抗コリン 作用性障害	他のフェノチ アジン系化合 物:長期投与 又は大量投 与により角 膜、水晶体の 混濁、網膜、 角膜の色素 沈着	1.通常成人1回メキタジン として6mgを1日2回経口 投与する。なお、年齢、症 状に応じて適宜増減する。 2.通常成人1回メキタジン として3mgを1日2回経口 投与する。なお、年齢、症 状に応じて適宜増減する。	1.気管支喘 息、2.アレルギー性鼻炎、じん 麻疹、皮膚 疾患に伴うそ う痒(湿疹・皮膚 炎、皮膚そう痒 症)

その他のアレルギー用薬

製品群No. 53

ワークシートNo.33

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用	C 重篤な副作用のおそれ	C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往症、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)	H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	用法用量	効能効果											
評価の視点	薬理作用	相互作用	重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	薬理に基づく 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそれ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 換えるおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)	スイッチ化 等に伴う使用 環境の変化											
		併用禁忌(他 剤との併用に より重大な問 題が発生する おそれ)	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの			使用量に上 限があるもの	過量使用・誤使 用のおそれ	長期適用に よる健康被 害のおそれ										
抗 炎 症 成 分	グリチルリチ ン酸モノアン モニウム	グリチロン注 一号	抗炎症作用			ループ利尿剤・チアジド系お よび その類似降圧利尿剤 (低カリウム血症)、甘草(偽 アルドステロン症)	偽アルドステ ロン症(顔面 不明)、横紋 筋融解症(グ リチルリチン 酸または甘 草を含有する 製剤)							偽アルドステ ロン症、ミオパシー、低 カリウム血症(低カ リウム血症、高血 圧症等を悪化)	高齢者、妊婦小児 等					長期適用に よる偽アルド ステロン症	グリチルリチンとして、通 常成人1日1回40mgを皮下 注射する。なお、年齢、症 状により適宜増減する。	薬疹
ビタ ミン 成 分	ビタミンB1 (塩酸チアミ ン)	塩酸チアミ ン散0.1% 「ホエイ」/ 塩酸チアミ ン散1%「ホ エイ」	ビタミンB1は ATP存在下に thiamine diphosphate に変換し、生 理作用を現 す。ピルピ ン酸の脱炭酸 反応やTCA サイクル内の αケトグルタ ル酸の脱炭 酸反応に関 与。トランスク トラーゼの補 酵素として五 炭糖リン酸回 路での糖代 謝や核酸代 謝にも関与				顔面不明(過 敏症)							ビタミンB1の 欠乏または 代謝障害が 関与すると推 定される疾患 (神経痛、筋 肉痛・関節 痛、末梢神経 炎・末梢神経 麻痺、心筋代 謝障害)で は、効果がな いに月余 にわたって激 然と使用す べきでない。					通常、成人には塩酸チアミ ンとして、1回1~10mgを1 日1~3回経口投与する。 塩酸チアミン散0.1%「ホエ イ」:1回1~10g、1日1~3 回経口投与 塩酸チアミン散1%「ホエ イ」:1回0.1~1g、1日1~3 回経口投与 なお、年齢、症状により適 宜増減する。	1. ビタミンB1欠 乏症の予防及 び治療 2. ビタミンB1の 需要が増大 し、食事からの 摂取が不十分 な際の補給 (消耗性疾患、 甲状腺機能亢 進症、妊産婦、 授乳婦、はげ しい肉體労働 時等) 3. ウェルニッケ 脳炎 4. 脚気衝心 5. 下記疾患の うち、ビタミン B1の欠乏また は代謝障害が 関与すると推 定される場合 神経痛、筋肉 痛・関節痛、末 梢神経炎・末 梢神経麻痺、 心筋代謝障害 [5. の適応に 対して、効果が ないに月余 にわたって激 然と使用すべ きでない。]		

その他のアレルギー用薬

製品群No. 53

ワークシートNo.33

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用	C 重篤な副作用のおそれ	C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)	H スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果
評価の視点	薬理作用	相互作用	重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の再発・悪化のおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)	スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果
		併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ) 併用注意	薬理・毒性に基づくもの 特異体質・アレルギー等によるもの	薬理・毒性に基づくもの 特異体質・アレルギー等によるもの			症状の悪化につながるおそれ 適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ) 使用量に上限があるもの 過量使用・誤使用のおそれ 長期使用による健康被害のおそれ			
ビタミンB2	ハイボン錠 20mg	コレステロール上昇抑制作用 薬的に酪酸リポフラビンを投与すると、ラノリン稀突油投与による血清コレステロール値の上昇を抑制した。		0.1~5%未満(下痢、悪心、嘔吐、胃膨満、腹部膨満)、0.1%未満(胃不快感、食欲不振)			尿を黄変させる(臨床検査値に影響)	高コレステロール血症及びビタミンB2の欠乏又は代謝障害が関与すると推定される場合の適応に対して、効果が無いのに月余にわたって漫然と使用しないこと。	高コレステロール血症に は、通常、成人1日60~120mgを2~3回に分割経口投与する。 なお、年齢、症状により適宜増減する。	経酸リポフラビンとして、通常 成人1日5~20mgを2~3回に分割経口投与する。 高コレステロール血症に は、通常、成人1日60~120mgを2~3回に分割経口投与する。 なお、年齢、症状により適宜増減する。	高コレステロール血症 ・ビタミンB2欠乏症の予防及び治療。 ・下痢疾患のうち、ビタミンB2の欠乏又は代謝障害が関与すると推定される場合、口角炎、口唇炎、舌炎、脂漏性湿疹、結膜炎、びまん性表層角膜炎 ・ビタミンB2の需要が増大し、食事からの摂取が不十分な際の補給(消耗性疾患、妊産婦、授乳婦、はげしい肉体労働時等) 高コレステロール血症及びビタミンB2の欠乏又は代謝障害が関与すると推定される場合の適応に対して、効果が無いのに月余にわたって漫然と使用しないこと。

その他のアレルギー用薬

製品群No. 53

ワークシートNo.33

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用	C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意 すべき副作用のおそれ	D 濫用のお それ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)	H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	用法用量	効能効果			
評価の視点	薬理作用	相互作用	重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべ き副作用のおそれ	薬理に基づく 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそ れ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)			使用方法(誤使用のおそれ)	スイッチ化 等に伴う使 用環境の変 化	
		併用禁忌(他 剤との併用 により重大な 問題が発生す るおそれ)	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの				使用量に上 限があるもの	過量使用・誤使 用のおそれ	長期使用に よる健康被 害のおそれ		
ビタミンB6 (塩酸ピリド キシン)	アデロキン 錠	体内でリン酸 ピリドキサル となり、細 胞・ミトコン ドリア内にお けるB6酵素群 の補酵素とし て生体のたん 白質・アミノ酸 代謝の中心 的役割を果た す。γ-アミ ノ酪酸の生成 や各種のアミ ン類(アドレナ リン、ノルアド レナリン、5- ヒドロキシトリ プトミン等)の 生成に不可 欠である。脂 質代謝との関 係も認められ ている。	レボドパ(レボドパの作用を 減弱)			頻度不明(長 期・大量投 与・手足のし びれ、知覚異 常等)	頻度不明(光 線過敏症)					長期・大量投与 で手足のしび れ、知覚異常	ビタミンB6の 欠乏又は代謝 障害が関与 すると推定 される疾患 (口角炎、口 唇炎、舌炎、 急・慢性湿 疹、脂漏性 湿疹、接触 皮膚炎、末 梢神経炎、 放射線障 害)では、効 果がないの に月余にわ たつて漫然と 使用すべき でない。 長期・大量 投与で手足 のしびれ、 知覚異常	塩酸ピリドキシンとして、通 常成人1日10~100mgを経 口投与する。なお、年齢、 症状により適宜増減する。 きわめてまれであるが、依 存症の場合には、より大 量を用いる必要がある場 合もある。依存症に大量を 用いる必要がある場合は 観察を十分に行いながら 投与すること。特に新生 児、乳幼児への投与は少 量から徐々に増量し、症 状に適合した投与量に到 達させること。高齢者では 減量。	ビタミンB6欠 乏症の予防及び 治療(薬物投 与によるものを 含む。例えば イソニアジド、 サイクロセリ ン、ペニシラ ミン) ビタミンB6の需 要が増大し、 食事からの摂 取が不十分な 際の補給(消 耗性疾患、妊 産婦、授乳婦 など) ビタミンB6依 存症(ビタミンB6 反応性貧血、 ビタミンB6依 存性痲痺、アミ ノ酸代謝異常な ど) 下記疾患のう ちビタミンB6の 欠乏又は代謝 障害が関与す ると推定される 場合 口角炎、口唇 炎、舌炎、急・ 慢性湿疹、脂 漏性湿疹、接 触皮膚炎、末 梢神経炎、放 射線障害(宿 疹)

その他のアレルギー用薬

製品群No. 53

ワークシートNo.33

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用	C 重篤な副作用のおそれ	C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)	H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化						
評価の視点	薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		薬理に基づき 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそ れ)	症状の悪化 につながるお それ	使用方法(誤使用のおそれ)			スイッチ化 等に伴う使 用環境の変 化	用法用量	効能効果
		併用禁忌(他 剤との併用に より重大な問 題が発生する おそれ)	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの					薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	使用量上 限があるもの			
ニコチン酸ア ミド	ニコチン酸 アミド散ソ ン	ニコチン酸ア ミドはニコチ ン酸とともに NAD、NADP に組み込ま れ、脱水素酵 素の補酵素と して広く生体 内の酸化還 元反応にあ ずかる。						高齢者、妊婦、産 婦、授乳婦、小児			2の適応(効 能又は効果) に対して、効 果がないの に月余にわ たって漫然と 使用すべき でない。		1.ニコチン酸アミドとして 通常成人1日25~200mgを 経口投与する。なお、年 齢、症状により適宜増減す る。	口角炎、口内 炎、舌炎、接触 皮膚炎、急・慢 性湿疹、光線 過敏性皮膚 炎、メニエル症 候群、末梢節 環障害(レイ ノー病、四肢冷 感、凍瘡、凍 傷)、耳鳴、難 聴	

その他のアレルギー用薬

製品群No. 53

ワークシートNo.33

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用	C 重篤な副作用のおそれ	C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)	H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	用法用量	効能効果										
評価の視点	薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		薬理に基づく 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそ れ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)			スイッチ化 等に伴う使 用環境の変 化	用法用量	効能効果					
		併用禁忌(他 剤との併用により重大な問 題が発生する おそれ)	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの						薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	使用量に上 限があるもの				過量使用・誤使 用のおそれ	長期使用に よる健康破 害のおそれ			
パントテン酸 カルシウム	パントテン酸 カルシウム	パントテン酸 はCoAの構成 成分であり、 CoAは生体内 でアセチル化 をはじめ、ス テロイド、脂 肪酸、ボル フィリン等 種々の生体 必須物質の 合成に関与 するとともに、 脂肪、蛋白 質、炭水化物 の代謝にも関 与している。										大量投与により 腹痛、下痢	2.の適応(効 能又は効果) に対して、効 果がないの に月余にわた って漫然と 使用すべき でない。		パントテン酸カルシウムと して1日10~200mg(0.1~ 2.0g)を1~3回に分経口 投与する。なお、年齢、症 状により適宜増減する。	1.パントテン酸 欠乏症の予防 および治療、 パントテン酸の 需要が増大し、 食事からの 摂取が不十分 な際の補給 (消耗性疾患、 甲状腺機能亢 進症、妊産婦、 授乳婦など)2. 下記疾患のうち、 パントテン酸の 欠乏または 代謝障害が 関与すると推 定される場合、 ストレプトマイ シンおよびカナ マイシンによる 副作用の予防 および治療、 接触皮膚炎、 急・慢性湿疹、 弛緩性便秘。 なお、効果が ないのに月余 にわたって漫 然と使用すべ きでない。					
気管支 拡張成分	d-塩酸メチ ルエフェドリン	アドレナリン 作動性の気 管支拡張作 用と中枢性鎮 咳作用を示 す。	カテコールア ミン製剤(不整 脈、場合によ っては心停止を 起こす)	MAO阻害剤・甲状腺製剤(作 用が増強)、キサンチン誘導 体・ステロイド剤・利尿剤(血 清カリウム値が低下)	β2刺激剤に より重篤な血 清カリウム値 の低下			頻度不明(熱 感)、0.1~ 5%未満(心 悸亢進、顔面 蒼白等、頭 痛、不眠、め まい、眠気、 神経過敏、疲 労等、悪心、 食欲不振、腹 部膨満感等、 口渇)	頻度不明(過 敏症)、					カテコールアミン製 剤を投与中(不整 脈、場合によっ ては心停止を起 こすおそれ)	甲状腺機能亢進 症、高血圧症、心 疾患、糖尿病、高 齢者、妊婦又は妊 娠している可能性 のある婦人、授乳 中の婦人、小児 等、重症喘息(血清 カリウム低下)			過度に使用を続 けた場合、不整 脈、場合によっ ては心停止を起 こすおそれがある		d-塩酸メチルエフェドリン として、通常成人1回25~ 50mgを1日3回経口投与す る。 なお、年齢、症状により適 宜増減する。一般に高齢 者では生理機能が低下し ているので減量するなど注 意すること。	下記疾患に伴 う咳嗽 気管支喘息、 感冒、急性気 管支炎、慢性 気管支炎、肺 結核、上気道 炎(咽喉頭炎、 鼻カタル)、 蕁麻疹、湿疹

その他のアレルギー用薬

製品群No. 53

ワークシートNo.33

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用	C 重篤な副作用のおそれ	C' 重篤ではないが、注意 すべき副作用のおそれ	D 濫用のお それ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)	H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	用量	効果					
評価の視点	薬理作用	相互作用	重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべ き副作用のおそれ	薬理に基づく 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそ れ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)	スイッチ化 等に伴う使 用環境の変 化	用量	効果			
		併用禁忌(他 剤との併用に より重大な問 題が発生する おそれ)	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの			使用量上 限があるもの	過量使用・誤使 用のおそれ	長期使用に よる健康被 害のおそれ				
アミ ノ酸 類 成 分	アミノ酸エチ ルスルホン酸 (タウリン)	タウリン散 「大正」	胆汁酸排泄 促進作用を 有する。 ・実験的肝障 害に及ぼす 影響を有し、 AT-P、γ-グ ロブリン、 BSP、血清コ レステロール /血清コレス テロールエス テル比を改善 させた。また、 肝細胞の再 生を促進して 組織像を改 善させた。さ らに慢性障害 群においては 間質の結合 織増殖を抑制 した。胆汁 分泌などの肝 細胞機能維持 に働いた。 ・心筋代謝改善 作用、心筋 保護作用 ・実験的慢性 心不全による 死亡率低下			0.5%未満 (嘔気、下 痢、腹部不快 感、便秘、食 欲不振)	0.5%未満 (過敏症)							高年齢者	アミノエチルスルホン酸と して、成人1回1gを1日3 回食後に経口投与する。 なお、うつ血性心不全に用 いる場合、本剤は強心利 尿剤で十分な効果が認め られないときに、それと併 用すること。高齢者で減 量。	高ビリルビン血 症(閉塞性黄 疸を除く)にお ける肝機能の 改善 うつ血性心不 全
整 腸 成 分	乾燥酵母	乾燥酵母 「ホエイ」	乾燥酵母は 含有する諸成 分が総合して 栄養補給、代 謝機能促進、 食欲増進、整 腸などの薬効 を現す。			頻度不明(大 量投与による 下痢)				大量で下痢				乾燥酵母として、通常成人 1日5~10gを3回に分割経 口投与する。 なお、年齢、症状により適 宜増減する。	ビタミンB群、 たん白質の需 要が増大し、 食事からの摂 取が不十分な 際の補給	